

舞妓・芸妓のキャリア

西尾久美子

舞妓や芸妓と言うと、お座敷で日本舞踊を舞う女性のきらびやかな着物姿を思い浮かべられる方が多いだろう。こうした優美なイメージを持つ芸舞妓たちは、伝統文化芸能を身につけそれをお客に披露する、350年以上の歴史を持つ女性の専門職に従事しているのである。現在、京都の五つの花街¹⁾には、舞妓と芸妓をあわせて約270人²⁾がおり、その人数はここ十年ほど横ばいからやや増加の傾向で推移している。そして、舞妓や芸妓のなり手のほとんどは、ぜひなりたいという意欲はあるが伝統芸能については経験のない、日本全国から京都にやって来た現代っ子の若い女性たちである。本論では、京都の五花街にのみ存在する舞妓³⁾という人材に着目し、現代の若者がどのように伝統文化芸能を身につけ一人前となっていくのかそのキャリアの形成について、筆者の京都花街における参与観察調査と芸舞妓たちや関係者へのインタビュー調査をもとに考察したい。

芸舞妓のキャリア・パス

芸舞妓は花街の中でしか成り立たない登録制の職業で、キャリア・パスは決まっている。しかも、年齢によってキャリアの節目が設定され、そのとき達成すべき技能の目標も明確である。例えば中学卒業後すぐ花街に来た少女は、1年ほど修業しテストに合格すれば16歳ごろ舞妓としてデビューし、20歳すぎには舞妓から芸妓になり、年期⁴⁾が明けるときに自営業者として芸妓を続けるか辞めるかを選択する。その後は専門職として技能を常に磨くことが求められる。また、芸妓には定年はなく、廃業する理由は結婚と他の仕事に従事するために大別される。舞妓から芸妓へのキャリア・

パスをまとめると以下のようになる。

- ① 仕込み 舞妓としてデビューするまでの約1年間の住込み修業期間。中学卒業後置屋に住み込むことが多い。この期間お化粧はせず、普段着で生活する。
- ② 見習い 舞妓としてデビューする日が決まると、見習い茶屋と呼ばれる特定のお茶屋でお座敷の様子を見せてもらう、実地研修に当たる約1カ月の期間。このときは地毛で日本髪を結うが、帯結びは舞妓のだらりの帯と比べて帯のたれの長さが半分ほどの「半だらり」と呼ばれる結び方で、ひと目で見習いとわかるようになっている。
- ③ 見世だし⁵⁾ (みせだし) 舞妓になる日は「見世だし」と呼ばれ、3日間は正装の黒紋付を着て、挨拶周りをする。見世だし前には、デビューする舞妓の面倒を見る育成責任者のお姉さん(引いてくれるお姉さんと呼ばれる)と盃を交わす。
- ④ 衿替え⁶⁾ (えりかえ) 舞妓になって4,5年目、20歳すぎに芸妓になることを、「衿替え」と呼ぶ。芸妓になると、かつらをを用い、着物は舞妓より地味な色柄で袂は短くなり、帯はお太鼓に結ぶなど装束が大きく変化する。
- ⑤ 年期明け 自前(じまえ)と呼ばれる独立自営業者の芸妓となるか、廃業するか決定する。自前になるときは、置屋の住込みから1人暮らしをする。その後、芸妓として専門技能をより磨くために、立方(たちかた=舞)か地方(じかた=三味線)の選択をする。また、廃業して花街を離れるときは、今後花街に戻る意思があるかどうか意思表示する。

お母さんとお姉さん

舞妓・芸妓になるためには、盃を交わし擬似姉妹関係を結ぶお姉さん芸妓が必要であり、このお姉さんが花街にデビューした新人芸舞妓の育成責任者となる。また、置屋のお母さん（経営者）が芸舞妓志望者を仕込みとして受け入れないと、希望者は芸舞妓になることはできず、このお母さんとは擬似親子関係を結ぶことになる。お母さんは仕込みと年期中の芸舞妓と生活を伴にし、日常生活の中で京言葉や立ち居振る舞いなどを躰ける役割を担っている。一方、お姉さんは、お座敷での仕事や日常生活について、妹の面倒をずっと見続ける一生続く関係であり、妹にとっては置屋から独立し別居するとやや関係が薄くなるお母さんと比べると、その関係性は長期にわたりかつ濃い。姉の花街における育成責任者としての負担はかなり大きい⁷⁾が、この姉がいるから妹は姉の指導をいつもうけることができ、何かあったときは相談して花街の一員となっていくことができる。また、芸舞妓には同じ時期にデビューした同期の意識という横のつながりも存在するが、花街では自分より一日でも早く芸舞妓になった人をすべてお姉さんと呼ぶ、公式的にはすべてデビュー順という芸舞妓全体の縦のつながりの姉妹関係が成り立っている。

花街のコミュニティのメンバー⁸⁾は、このように擬似姉妹関係と擬似親子関係によって結びついており、新人の芸舞妓はこの花街の家族関係の一員となることで、キャリアを形成していくことができる。ここで、お姉さんとお母さんは、いわゆるOJTの責任者やコーチング担当者といった役割を果たしているのである。

女紅場（によこうば）

京都の芸舞妓は、現役である限りずっと花街にある芸舞妓養成専門の学校に在学する。この学校の歴史は明治5年にまでさかのぼり、当時の名称を踏まえて女紅場と呼ばれることが多い。女紅場では、芸舞妓の基本技能の舞、長唄・小唄・端唄・常磐津といった邦楽の唄のほか、三味線・鳴り物（鐘・太鼓・鼓）・笛・琴といった邦楽器の演奏も

教えられている。さらに、立ち居振る舞いの訓練にもなるお茶は必ず教えられ、華道や絵画、俳諧など芸舞妓として知識を持っていることが望ましい伝統文化に関する一般教養的な科目も教授される。開講されている科目の先生は「お師匠さん」と呼ばれる各伝統芸能の家元や名取等の専門家であり、伝統芸能の基礎的な「形（かた）」を身につけさせることを目的にして教育がされている。

新人の芸舞妓にとって不可欠な日本舞踊の基本的技能の育成方法として、女紅場では見て学ぶ方法が採られている。新人の芸舞妓たちは一番早くに学校に来て、最後に自分が稽古をつけてもらう。こうして長時間多数の先輩たちのお稽古を見つめ続けることで、基本的な踊りの「形」を何回も何回も見て覚えることと同時に、同輩の踊りの様子を見れば現在の自分の技能を知り、少し先輩の様子を見ると近くの到達目標を、大きなお姉さんと呼ばれる大先輩の様子を見ると将来のあるべき姿を具体的に知ることができる。さらに、花街の芸舞妓全員が同一の流派の日本舞踊を学習することで基本的技能の形が統一され、同じ花街の芸舞妓ならお座敷などで詳しい打ち合わせをしなくても、曲名を聞いただけでその場にいる芸舞妓ですぐに踊ることもできる。

このように芸舞妓の基本的な技能を学校で育成することは、花街の伝統技能の統一性につながり、芸術性の高い伝統美をお客にサービスとして提供することができる。また、コストの面でも個人稽古よりは安くなるため、新人の芸舞妓などまだ売上への貢献が期待できない時期の育成にかかる置屋の支出を抑えることができる。

お客の役割

芸舞妓のキャリア形成には、花街に外部から継続的に参加するお客も重要な役割を果たしている。京都の花街のお茶屋は、「一見さん（初めてのお客様）お断りの世界」であり、花街に入るための敷居が高い。しかしこの敷居を越えたお客は、馴染み客や鼠窟客となり、お座敷で芸舞妓と顔を合わすことが多くなる。このお客たちは芸舞妓に対して、一般的によく話題になるような異性としての愛情⁹⁾だけではなく、守り育てるような父性的な

愛情を芸舞妓に注ぐことが多いのである。筆者がインタビューしたお客の一人は、「新人舞妓を応援するが、異性としての気持ちを抱くことはない。修業のときから知っている子は、まるで孫娘のようだ。舞妓さんになるために地方から出てきて、京都の名所に行ったことがないときは、連れて行ってあげることもある。それは、新人の舞妓さんがお座敷でお客さんから京都の名所を聞かれたときに、知らないと答えたのでは、彼女が恥をかくからだ」と語っており、これと類似の話は複数のお客から聞き取ることができた。また、伝統文化芸能について知識の深いお客は、芸舞妓の技能について評価やチェックをすることもある。ある芸妓は、「よくお座敷に見える目利きのお客から、自分の舞が以前よりよくなったと言われたことは、とてもうれしい」と語っている。このように、お客は長期間花街に継続的に参加することで、芸舞妓の育成を見守ることが多くなり、芸舞妓のキャリア形成に良い影響を与えているといえよう。

花街のダイナミズム

舞妓・芸妓のキャリアの特徴として、まず、キャリア・パスと節目が年齢と経験年数で明確に決められ、新規に花街に参入した芸舞妓たちがここでやっていけるのかどうか選択する時期と基準がわかりやすいことが挙げられる。技能に関しては、花街にある学校で基本的な形の教育が、花街の擬似家族関係に基づく人間関係の結びつきの中で立ち居振る舞いやお座敷での芸事の発露についての教育がなされ、専門教育とOJTの相互作用で技能が比較的短期間に育成されるようになってきている。また、お姉さんやお母さんという家族関係のメタファーで育成責任者と新人は結ばれ、上下関係の厳しさはあるが、指導をうけることについてルールが明確になっており、しかも育成責任者は花街の中で育成の技能についてもチェックされるために、非常に丁寧に気を配って指導をしている。さらに、慣れない花街で必死にがんばっている若い芸舞妓にとってはお客の見守りと励ましが大きな支えとなり、またお客が努力を続ける芸舞妓の姿に育成の喜びを感じ花街に足を運ぶことにもつながっている。

このように舞妓・芸妓のキャリアは、花街にかかわる複数の関係者のかかわりの中で形成され、しかもお客がキャリア形成にかかわることで継続的な市場を確保する側面も有している。さらに、芸舞妓のキャリア形成にかかわる関係者は花街の伝統的な複数の制度によって結ばれ、これら制度はダイナミズムをもって変化している。だからこそ京都花街は伝統文化産業として現在まで350年以上にわたり多くの人々を魅了し続けることができ、その後継者として現代の若い女性たちを育成することができるのである¹⁰⁾。

注

- 1) 祇園、祇園甲部、先斗町、宮川町、上七軒の五つ。舞妓はこの五つの花街にしかない。
- 2) 京都伝統芸芸財団の調査によると、2005年3月末現在で、舞妓75人、芸妓195人が京都の花街にいる。
- 3) 一般的に芸者と言われるが、京都の花街では芸妓（げいこ）と呼ばれており、花街の関係者や京都に古くから住む人は、芸者という呼称は用いない。こうした地域で受け継がれた職業の呼称に準拠して、本論では、京都の芸妓と舞妓とをあわせた呼称として芸舞妓を用いている。芸妓になる前に舞妓という呼称が使われるのは京都の花街だけである。他の花街では半玉（はんぎょく）と呼ばれ芸者とほぼ同じいでちをする。以前は芸事に興味があり知り合いの紹介で花街に来る少女が多かったが、現在では舞妓にあこがれてインターネット上のホームページなどを通じて花街のお茶屋や置屋を知り、京都の花街にやって来る少女が多くなっている。
- 4) 年季の表記も既存の文献で用いられているが、本論では参与観察することができた場で使われていた表記を用いる。この期間は、5~6年間で、見習い期間と考えられ、給与はなく置屋に住み込む。公休日は月に2日。
- 5) 見せだし、店だしなどと複数の表記が既存の文献で用いられているが、本論では参与観察することができた場で使われていた表記を用いる。
- 6) 20歳をすぎたころに芸妓になることが多いが、明確に何年目とは決まっていない。置屋の事情（舞妓がいなくなると困る場合、仕込みがデビューするまで続けることがある）や舞妓の容姿（幼く見える人は長めに舞妓をする）によって替替の時期は異なる。
- 7) 例えば、花街の踊りの会で妹が誤って舞の途中に扇子を落とした場合、翌日姉につきそわれて妹は先輩のお姉さんやお茶屋にあやまりにまわるといったことが見受けられる。
- 8) 芸舞妓とお茶屋や置屋のお母さん。見習い茶屋のお母さんとそこで見習いをした芸舞妓にも擬似親子関係が見受けられる。芸舞妓のキャリア形成と花街コミュニティの関係者の役割については、西尾（2005a, 2005b）に詳しい。
- 9) お客様というと、すぐ旦那になるといったことが想像されるようであるが、芸舞妓への異性としての愛情だけで、芸事や花街の慣習に詳しくない場合は旦那になることは困難である。これは、旦那になることは、芸舞妓が芸の道に精進することへの援助を惜しまないということとほぼ同義であると花街で考えられているからである。
- 10) 芸舞妓のキャリア形成を支える制度と、その複数の制度と

花街の事業システムに関連については、西尾（2006）に詳しい。

参考文献

- 加護野忠男（2005）「京都・祇園に学ぶ『アンバンドリング』という手法」『プレジデント』第43巻第16号，107-109頁。
- 金井壽宏（2002）『働くひとのためのキャリア・デザイン』PHP新書。
- 西尾久美子（2005a）「伝統文化産業におけるキャリア形成に関する理論的・実証的研究——京都の芸舞妓の事例から」『六甲台論集——経営学編』第52巻第1号，1-19頁。
- 西尾久美子（2005b）「伝統ある仕事におけるキャリア形成とアイデンティティの確立に関する研究——京都の芸舞妓の事

例から」神戸大学大学院経営学研究科博士課程モノグラフシリーズ，#0510。

西尾久美子（2005c）「伝統文化産業における個人と制度のかかわりに関する実証的研究」『六甲台論集——経営学編』第52巻第2号，29-44頁。

西尾久美子（2006）「伝統文化産業におけるキャリア形成と制度——京都花街の芸舞妓の事例」神戸大学大学院経営学研究科博士課程モノグラフシリーズ，#0526。

にしお・くみこ 神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程。
